

不安の超克へ (下)

梶原和義



理性と良心

不安の原因は外にあるよりもむしろ我々の内側、心の中にあると述べたが、それは心の中に理性と良心という不思議な機能があるからである。我々の心理構造は、理性と良心という二本の柱と、そのまわりに自我観念を主体としたさまざまな欲望意識があると見ることが出来る。現代人の大半はほとんど後者である自我観念によって生きている。デカルトは「我思う故に我あり」といったが、この我というのは自我のことである。近代哲学はこの自我を確立、主張することから始まり、人権思想を加えてますます強固なものとなり、現代に到ってついに最大に成長した。現代人の自我がいかに巨大で頑固なものになったかは、世相を見ればよく分る。大国はエゴイズムをまる出しにして小国を食いものにし、巨大企業は政府をあやつって自社の利益のために戦争をしかける。公害問題、交通問題、物価問題、労働問題等多くの社会問題は、一皮むけば皆お互いの自我をぶつけあっている所から発生している。自分を善とするために、

ことさらに他人の悪を誹謗し、欲にうずまいて
いるのが現代人のいつわらぬ姿である。

こうして自我をふとらせればふとらせるほど、
理性と良心はますますふみにしられていく。理性と良心は一体何物なのか、どうい
う働きをもっているかを考察しよう。そうす
れば自我に立っていることが正しいのか、理
性と良心に立っているのが正しいのかが分
かるからである。

まず理性について考えてみたい。よく理
性的とか理性によってとかいう言葉が使
われる。これは知的にとり、合理的に、冷
静に物事を処理するという意味であって、
本当の意味での理性に立ったものではない。
その証拠に理性そのものが何であるかを
はつきり理解して行動しているのではない
からである。

よく理性は永遠の真理を求めているとい
われる。それは理性がもともとそこら発
しており、それをつかむためにあるから
である。理とは物事のことわり、すじ道
のことである。不変の法則、変らないもの
、原理的なものであって、すべての人間
と大自然をつらぬいてあるもの、要約し
て言えば宇宙の本質ということになる。永
遠に変わらないものはこれ以外に考えら
れないからである。性とは生まれつ

き誰でもがそなえているもの、という意
味である。つまり人間は宇宙の本質であ
る理を誰れもが生れつき持っていること
になり、この機能によって物事を見てい
ることになる。理論、理屈、というのは
この宇宙の本質にそった展開であり、理
解とはこの宇宙の本質を正しく認めるこ
とである。宇宙の本質の分派ともいうべ
きは一人一人に与えられており、これに
よって宇宙の本質を見るから宇宙が理解
できる。同じ性質のものだから解しあ
えるのであって、もし本質的に次元の違
ったものであるならば、根本的な理解と
いうことはありえない。そこには全くの
誤解と矛盾があるのみである。宇宙本質
の分派に立ってみれば、大なる仕組み
や宇宙の構造、原子の世界の秘密が見
えてくるのである。

人間は理性というすばらしい機能を与
えられておりながら、これを正しく認め
ようとせず、自分の意見がむしやに主
張したが、だから必然的に誤解というこ
とはいえず、誤解と誤解と混乱しか生じ
ないものである。お互いを理解したいと
思うなら、理性の本質を充分認めた上
で話し合いを始めるべきである。協同
体建設に関しては経済的、社会的に多
くの困難が伴うが、最大のものは徹
底的に理解しあえないということであ
ろう。それは協同体建設の出発点にお
いて、お互いの意見の主張から始めら
れるからである。出発の時点ではたまた
ま合意しているかのように見えるが、
実際は、お互いの利益に立ち、自分の
立場に立った協同体しか考えてないか
らである。これが問題である。理性と
自我との関係をも少し掘り下げて考
えてみよう。理性は宇宙の本質の分派
であるから、それ自体宇宙とながって
おり、すべての人の理性ともつなが
っている。従ってそれ自体自分だけ
という個々の立場を持たず、全体に
広がる性質と自由さをもっている。
それに対して自我というものは、全
く自分の立場だけであり、他人とは
本質的に完全に遮断されてしまっ
ている。ここまで厳しく考える人は、
なかなかいないが、実際はそうであ
る。どんなに仲のよい恋人どうしでも、
夫婦でも、又親子、兄弟でも、お互
いの心のすみずみまで理解しあえる人
はいない。どこかに自分だけという
秘密があり、いつか知らぬ間にす
まみ風が入り、憎しみあいを始める。
子供というのは、文字通り親の肉
体から出てきたものであるから、心
理的にも親と全く同質同次元のも
のでなければならぬのに、親子
ほど憎しみあい、けんかを

するものはいない。結局自分を本当に理解してくれるのは自分であり、他人は心から許しあえるものではないことになる。従って自我というのはそれ自体一つの域であり、しかも、それから自分自身が抜け出せないという意味で独房ということになる。自らがとじこめられた世界である。自分の世界の中でのみ考え、意見を出す。しかも他人とは完全に切斷されているから、永遠に理解ということはありえない。これが自我によって生きている人間の宿命である。

協同体は自我に立っているならば、お互いが全く理解しあうことはない集団の集りにすぎないであろう。自我観念をすてて宇宙の本質である理に立たなければいけない。

良心とは一体何であろうか。普通良心とは自己の言動に対して善悪の判断を下す心の働きといわれている。これはちょうど危険の場合に自動的に警報を発する自動警報装置のような役目をもっており、人間社会で言えば警察の役目をしている。心が正常である人はどんなにハレンチな行為をしようとしてもそうはできない。そこにはおのずからという限度があって、そう簡単にはふみこえられない。これはすべて良心が人の心を監視し、一つ一

としてである。

人間が人間としてありうるのは理性と良心とが与えられているからであるが、もしこれを正しく用いれば人間はすばらしく向上できるが、間違つてこれを用いればとんでもない災害をもたらす原因ともなる。しかもこれは本来自分のものではないから、いつ何時とりあげられるか分らない。

不安の根本原因は命が自分の手に握られておらず、それがいつ取り上げられるか分らないということにある。言ってみれば一瞬先は全く闇だからである。死に対する恐怖は死の向こうはとんでもないものがましかまえてあるからである。つまり、理性と良心という最高のものを無断で私有し、勝手に使用したことに對する責任が回ってくるからである。仏教等では地獄という形でこれを表現しているが実際はもっとすごいものになるであろう。誰かによって呪われるとか、責められるというのではなく、自分を燃える火のごとく呪われねばならない。しかも永遠に（つまり一瞬の休みもなく）その状態でおかれるからであり、そこには全くの孤独で、誰も手助けをしてくれるものもないし、その道具もないという状態におかれるのである。

つチェックしているからである。江戸時代に付家老というものがあつた。これは幕府から親藩に、又大名の本家から分家に送られたもので、たえず監視する役目をおせつかつていた。そして大名が幕府にそむくような行ないをした時、「殿」と呼んでいさめたという。人の心にある良心も同様で、人の心の中にあるが、その出先はその人ではなく、他の人格から送られてきたものである。これが付家老と同じ役目をしているのである。

しかし良心はただ人の心をチェックすることのみが目的ではない。これは宇宙のモラル、宇宙の人格を愛として受け入れるためにもある。よき行ないをしたり、それらを見た時に感じる喜びは、良心が愛を受け入れることを最大の喜びとしているからである。

この宇宙はそれ自体雄大な生きものであり、生きているための基本原理がある。これが最高、最大の真理であり、これを理解するのが理性の役目である。又この宇宙には論理性のみではなくそこに必ず人格性が伴っている。すべてのものが論理性と人格性をかねそなえている。この両者を一度に表現したものが詩である。宇宙を最も端的に現わそうとすればその形式は詩的にならざるをえない。宇宙の

もし人間に理性と良心という機能が与えら

れていなければ、それこそ動植物のように楽に死ねるのであるが、人間だけはそうはいかない。いつてみれば人間とはとんでもない重荷をせおいこまされたやっかいものである。もし自分の意志で生まれてきたものなら、自分でさんざん好きかってなことをして好きな時に死んでいけるのだが、自分の意志で生まれてこなかった、つまり主体性が自分の側にないために、こんな悲劇になるのである。死にたくても死ねないのが人間の業である。この業は死ねばどうにかなるといったものではないから、生きている間にこれをしまつしななければならぬ。そうすれば二度と死というものはやってこないからである。肉体的に死ぬ前に死を心理的に経験する。そうすれば再び死に定められることはないのである。

人間の不安とはすぐ自分の足もとに永遠の死に至る奈落の穴があげられているという、絶対絶命の所に立たされているということにあるといえよう。

生命の深い認識を

協同体は何のために存在するのであるか。

生き方それ自体が曼陀羅であり、一大ロマンであるからである。それを見る人間にもロマンチズムがそこはかとなくひびいてくるのである。人間の歴史、人生というものを文字で表現していくとそれがおのずと小説になつてしまふ。人生、歴史が小説となるというのは、それが本来詩的なもの、小説的なものだからである。良心は詩の人格的側面、愛を追求してやまないものである。近代文明のだから理性と良心のだからによっており、その結果宇宙の愛が受けられなくなつてしまつた。

人間に理性と良心が与えられているということは一体何のためであろうか。落ちついて考えてみるとこれほど不思議なことではない。肉体存在の人間はあくまでも生物的存在であり、見えない宇宙の秘密を知る機能が与えられるすじあいのもではない。肉体が三次元的なものであるとすれば、理性と良心は四次元的なものであつて、これは想像できないほどの段違いである。人に理性と良心が与えられたというのは、人間が本来は生物ではなく宇宙の本質に生きるもの、宇宙の中核機能の一部として造られたとみるべきである。肉体を与えられて地球に生かされているというのは、このことを充分にわきまえるための訓練

その必要性、意義と価値はどこにあるのか。

だいたい一般的に協同体とは生活を共にし、それをまかなうための生産を共にするというのが大部分である。しかしこれだけで人間は本当の満足があるであろうか。確かに生活はお互いに保証できるであろう。利害の対立もそれほど激しくはないだろうから、ある種の安心は得られるであろう。しかし共に生活し、生産するだけで、人間は心からの満足があるであろうか。それだけに人生があるといえるのだろうか。

前から述べているように、もし人間が単なる生物の一種であるならば、生活し、老いれば死ぬというだけのものであるから、それでいいであろう。しかしお互いの心の底をわって考えてみると、それではどうしても納得できない何かがあるに違いない。口でははつきり言えなくても心の中では何となくうごめく叫びがあるに違いない。生活よりもっと本質的なものがあることをお互いがうすうす知っているから、単に協同生活するだけでは満足できないことになる。表面的に意見の相違、利害の対立ということで物別れになることが多いが、その底には何かもう一つわりきれないものがあり、それが違った形で表面化して

くるからである。

人間はどんな立場にいる人でも結局一つのものを求めざるをえない。それは宇宙にたった一つある真実ということである。遅かれ早かれ、どんなにいがいてもあばれても、これを求めなければならぬ運命におかれている宇宙にたった一つある真実とは言いかえれば命そのものであることになる。どんなに大切なものでも命にかえられない。命こそかけがえのないものだということを知っていながらそれが自分のものとしてしっかりと把握されていなくて人間に矛盾があるから、それを確かなものとして、つまり自分のものとしてつかまえないければいけない。このためにのみ人生があり、他の人間がいる。従って協同体は当然のこととして、これを目的としたものでなければならぬ。又これを発見するための協力者の集まりが自然に真の協同体という形になってくる。しかもそれは命を基盤としたもの、本当の命をつかむことを目的としたものであるから、生命協同体と呼ぶことになる。

生命協同体は生命を基盤、目的としたものであるが、この生命とは何かという問題がまず究明されなければならないであろう。だい

われているからである。食べることもほとんど自動的に行っている。同じ物を見ているのではなく見させられているのであり、聞いているのではなく聞かされているのである。

人間の行為はすべて存在人間が主体となつてやっているのであって、自分だと思つている主観とは全く別人間なのである。こう簡単に書いてあるが、主観人間と存在人間（客観的人間）が別だということには非常に難しい。

人間存在をよほど冷静に注意してみないとこのからくりは分らない。なぜなら、普通、人間はすべて自分という発想法によつて思考しており、客観人間だといつても主観的立場でそれを類推しているからである。客観人間という場合は、主観人間の場合からしてみるとそれこそ全く架空の事実くらいにしか思えないであろう。現在この文を読んでみえるかたも何か私が宗教か哲学にこりかたまった人間であつて、偏狂なドグマを述べているものとか、単なる理想論を述べているものとか思えないかもしれない。ただ言い回しとしては似たような面があるかもしれないが、内容はまるきり違う。宗教は人間の幸福とか救いということのみを考えている。神や仏といつても彼らが考えている神や仏であつて、それが本物

たいおかしいことに、人は誰でも命あつてのもの、命より大事なものは無いと思つていながら、いざ命とは何であるかと開きなおされると答える人はほとんどいない。一番大事なもののなら一番先に究明し理解しなければならぬのに、一番あとまわしにしておく。これは人間の甚だしい怠慢ではないか。まず次のような意見がでてくるであろう。命は誰でも生れた時から与えられており、究明するものも現にあるのではないか。これ以上どうすればいいのかと。肉体的には確かにそのとおりである。しかしこれは生物学的な命、生命のことであつて命ではない。これと命とは厳密にいつて別物だということである。

この地球上に生物は何百万種類もいる。それぞれが生きかつ動いており、次から次へと生まれかわつていく。たつた一輪の花の中にも生命があるが、その生命自体を花がつくつたと思う人は一人もいないであろう。その時、花という形で生命が示されているのであつて与えた他者が必ずあるに違いない。この他者は命の本源といふべきものである。これがもとになつて何百種の生命になつていく。命の本源というものがどこかになければ、この多種の生物は生じないはずである。しかもこの

だという証拠はどこにもない。その個人全部違つており、ばらばらである。千人集まれば千の神や仏があることになり、全くばらばらで、各々自分勝手な想像をしていることになる。哲学者は哲学者で、自分の思想の範囲内でぐるぐる回つていくだけであつて、本当の宇宙をのぞきうる人はほとんどいない。

私が述べていることは独断でも偏見でもない。ただあるがままの真実（事実）をありのままに述べているだけである。この宇宙には一つ命があるだけである。一つだから絶対必然的なものである。そうでなければこの大宇宙が永遠の過去から永遠の未来へ、一糸みだれずにゆうゆうと流れていくはずがない。宇宙はそれ自体が雄大なイキモノである。その命が自然界の動植物となつて現われ、さらに人間の命となつて現われているだけである。人間の場合と動植物の場合とは現われているといつてもその状態はまるきり違う。動植物は宇宙の物としての面が現われているにすぎないが、人間の場合は宇宙の中枢機能である心の面が現われている。これは宇宙のヘルパーとなる素質が人間に与えられているということである。

本源は一つであり、この命がすべての生き物と人間とを貫いて流れている。当然人間にもその命が流れているはずである。これは表面的には心臓の動きとなつて現われているが、本質的には命のもとがそのまま移されているはずである。

話をわかりやすくするために次のような例話をを用いよう。生物的生命に対して命そのものとは理性と良心の機能であるといえる。その項で述べたように、これは人間が勝手につくくりだしたものではなく、ある時点において人間に植えこまれたものである。理性と良心の機能、あるいはその原理となつていくものがすなわち宇宙の命とつながつていく。いいかえればその分派としてその原理があるといえよう。

人間は誰でも自分の命があると思ひこんでいるが、これが大間違いである。肉体そのものを考えても、自分で体の各部を造つた人は一人もいない。心臓や肺を自分で造つたおぼえのある人は誰もいないであろう。手で物をつかもうとする時、第一命令は自分の意志で行うがそのあとには中枢神経がほとんど自動的に行つてくれる。その証拠に途中から他のことを考えはじめても始めの動作は自然に行な

惑星である地球に動いているということ、これは考えれば考えるほど不思議な現象である。天体には何億という星があるが、皆岩と砂のみで生物はどこにもない。たつた一つ地球だけに、しかもそれが何と地球よせましと充滿している。地球はそれ自体が生命の宝庫であつて、こんなものは宇宙広しといえどもどこにもない。全く奇跡としか言いようのない出来事が地球では日常茶飯事のこととして起こつていく。もしどこかの遊星で草木や動物が一匹でも発見されたら、それこそ世紀の大発見となるであろうが、地球でそれがあつても誰も驚かない。この辺に人間の固定観念の恐ろしさがある。

何回ものべているが、肉体と理性、良心という心理機能は全く次元の違った異質物で、本来これら一つにできないものなのである。物理学の法則から言えば物質は物質と離合集散すべきもので、物質が心理と結びつくといふことは絶対ありえないことであるし、それは物理学の法則に反した行為になつてくる。宇宙にたつた一つ堂々と物理学の法則が破られ、人間という奇妙な生き物が誕生している。宇宙自ら物理学の法則を破つて人間というものを誕生させた。物と心が一つになつた生

物が誕生した。これは全く次元の違ったものがあわさっているのであって、あくまで仮の状態ではない。これをどう扱うかは人間それ自体に任せられたのである。宇宙が人間を生んだのは、宇宙を正しく理解し、宇宙のヘルパーとなるためであるが、これを悟るかどうかは人間に自由意志を与えて人間にまかせたのである。

人間存在は仮存の状態である。宇宙で最高の次元のものと最低の次元のものが全部植えこまれている。大宇宙におけるあらゆるものが縮図され、小宇宙としておかれている。だからこれをうまく用いれば宇宙で最高のものとなるが、誤って用いれば宇宙で最低、最悪のものに転落する危険性がある。最高状態は宇宙のヘルパーとなることであり、最低の状態は永遠の死を与えられ、永遠ののろいにおかれるということである。

新生命協同体に 期待する

今まで現代の不安について色々と述べてきた。現在の状況を考えてみて、今後不安は減

少されるというより、増大する危険性の方がはるかに多い。世界の人口は間違いなく増加し続けていくであろうから、それに伴う有形無形の様々な問題が出現してくるであろう。その他の問題も山程ある。従って生きていくための不安も間違いなく増大するに違いない。協同体の必要性は、このような社会的必然性から起こるべくして発生していくものである。生活を保証するものと同時に、命を完全には解消する方向で実現されなければならない。

協同体設立に関しては、お互いの利益のため、あるいは社会より脱落、離脱し、逃避的なことのためにつくられてきた場合もある。その結果、非社会的、反社会的なものになりやすい。人間回復の精神を旗印にしていながら、外部に対して極めて排他的、非協力的、非人間的なものができやすい。

協同体という名のもとに集まるならば、そのグループ内だけの協同ではなく、広く一般社会とも、最終的には人類全体とも協同しあわなければならない。協同とはそういう意味なのである。一切の固定観念、限定にとらわれない、本当の自由と愛とに満たされたもの

ない。
人間が一番ほしいと思っているものは命そのものである。死んでも命がありますようにというのには誠に名言であると思う。死と命とは別物であることを示している。もしそうでなければ死なずに命があるようにというはずだからである。つまり肉体は滅んでも、魂としての命は永遠にありますようにという願いがこめられているのである。従って基本的に言えることは命そのものと肉体とは別物だということである。何回も述べているように、肉体は純然たる物質であり、これがある時点において滅亡するのは物理学の法則である。しかし人間の意識はそうではない。物理学の法則を無視して、あるいは全く関係なく無限、永遠というものを思考する。思考するというのは、そういうものがあることを無意識に知っていて思考しているのである。物質的世界でなく命の世界がこの宇宙にある。人間を含めて万物を貫いている永遠無終の生命の流れがあることはあきらかである。命は一つの源より発生しており、一つではない。この命の中に万物も人間もおかれているのである。この命を発見するということが、生命協同体の絶対的条件でなければならない。なぜなら

人間を本当に結びつけているものは思想でも労働でも、生活でもなく、命のみであるからである。この命にもとづく連帯のみにあって真の協同ということがあるからである。従って生命協同体は自分の主観的なことよりも、客観的の生命のことをまず重視することになる。

客観的存在者の集団ができ、これは最終的に万物との集合体ともなる。宇宙に流れる命は一つであるから、この意識に立てば、人間も万物も同じ流れの中に入っていることが自覚できるからである。この事が人々にはつきり了解できた時こそ地球上に本当の平和が訪ずれるのである。地球上において、歴史上まだ一度もこのような平和が訪ずれたことがなかった。万物の上にも本当の平和というものが実現したことがなかった。それは人間がこの生命の大河からはずれ、固有の意識において別個に生きたからである。これが万物を流れる生命の関係に悪い影響を及ぼし、人間と万物との関係を狂わせてしまったのである。人間が宇宙の命からはずれてしまったことは、単に人間と万物との関係を狂わせたのみではない。天候とか地球物理にも重大な影響を及ぼしていった。これが極端な天災異変を

でなければ、協同体とはいえないであろう。今後要求される協同体の目的は生活を保証することよりも不安を解消し、本当の意味での平安をうることに、命そのものの実体をうるためのものでなければならない。その研鑽の場としての意義あるものであると考える。

私は『月刊キブツ』誌名古屋読者会設立趣意書に「この集まりはただ各地にある協同体活動を学ぶのみでなく、広く人間の苦しみ、なやみ、よろこびを分かちあい、人間の原点を発見するとともに、本当の意味でのユートピアを見出すことにある」という意味のことを書いた。真のユートピアとは永遠の命を分けあう場のことである。これはある場合には、生活の保証よりも優先せねばならないことであらう。生活を優先する場合には必ずお互いの利害が優先する。だから失敗の原因となるそうではなくむしろ逆の行き方、つまり生活を犠牲にしても命を学ぶという態度をとるべきである。この場合の基本的な考え方は「与える」ということであらう。労働と時間と自分のすべてを一切の条件なしにお互いに与えあうということである。もらえればよいし、もらえなくてもよいという与える精神、これがなくては本当の協同体ということはいえ

生じさせる原因ともなっているのである。洪水や、台風・早魃・冷害は本来あるべき姿ではない。猛獣が人間を食い殺す、毒ヘビが人間をかむということも本来あるべき姿ではない。さまざまな病気があっても正常なことではない。これらは自然におこるべくして起っているのではなく、人間の墮落ということから発生してきたものである。もし人間が命の大河の中にもどり、正常な姿にたちかえるならば、自然現象も万物との関係もすべて正常にもどるであらう。その時には空前絶後の平和が地球にもたらされるに違いない。
私は現在のような混乱した様子をまのあたりに見て、ますますこの感を強くしている。なぜなら時代が悪くなればなるほどその後にくるものはよいものだからである。ちょうどカキが熟しきった時にそれがボロリと落ちるように、又うみが出てしまえばあとが良くなるように。悪がみちて人間の中から悪が完全に出てしまえば、理性と良心は本来の姿で露呈してくるからである。この時に滅びるものは滅びるであらう。しかし始めめてそこからのがれ出るものは生かされるであらう。現在はまさにこの岐路に立たされているのである。私はこのような時代が来ることを確信して

いる。人間が宇宙に置かれた地位、歴史の必然性からしてこうならざるを得ないからである。しかしそれは我々の期待に全く反したものである。それは人間の都合によってなされるのではなく、あくまで歴史的意志によってなされるからである。現在の人間が持っている人間観と世界観が全く否定された形において実現されるからである。宇宙は人間の意志で動いているのではない。徹頭徹尾宇宙の意志で動いているのである。この宇宙の意志によって自然界や人類が生まれたのである。来るべき社会は完全に宇宙の意志にそったものになるであろう。ここにおいて人間の真の姿が具現され、ユートピアも実現するであろう。

マルクスは資本家と労働者との関係から、経済面において労働者の解放をとえ、理想的な共産主義国家の出現を望んだ。人種問題、民族問題文化的相違の問題は、世界に統一した共産主義国家をつくることに極めて大きな障害となるであろうことをマルクスは軽視していたが、かりにそれらの問題が一応解決され、共産主義国家が実現したとして、その後はどうあるべきかを述べていない。人間が経済的に解決されるということはほんの第一歩

にすぎない。次に来るべき思想的解放、自我というものの解放されなければならないという大問題を見出しにしまっている。これは本来から言う順序が逆になっている。まず人間を自我から解放した後には経済的解放を考えるべきである。そうすれば両者はスムーズに解決されるのに、この順序を誤り、経済的な解放のみをあまりにも強調したために、思想面において人間をがんじがらめにしづらなければならないという悲劇が発生した。今日のソ連や東欧諸国における状態がそれである。中共も最近ようやくこの誤りに気がつき自由化への道をあゆみだしたところである。

人間が経済的に自由になったとしても幸福は得られない。むしろ怠惰・放縦・無気力のみが蔓延するのみであろう。マルクス主義者達にとっては、この宇宙にも一つの命がある、死を完全に止揚した本當の命があるなどというのは、思いもよらないことであろう。これは地球が消滅した後にも続く命であって、マルクスの理論は人間が生きている間のみ通用するものである。

新生命協同体はマルクスの理論をはるかにこえた、全く新しい、しかもとんでもなくス

ケールの大きいものである。宇宙でたった一つの真実、永遠を背景としたものである。これは未来次元に属する論理であって、現在の人間には全く空想的なもの、幻想的なものと思えないであろう。詳細にわたるはつきりした論理体系を述べていないからでもあるが、根本的には自分の既成概念をすてたむこうにある問題だからである。しかし人間が絶対に否定できない事実があるようにこれらも否定することはできないであろう。(完)

次号特集予告

特集 ユートピア

ユートピアとコミュニケーション

長谷川進

ユートピアン共同体の歴史

山根常男

無可有郷から遊動郷へ

大沢正道

ひとつの試み

——金峰プロジェクト

小林茂夫

告知板

■心の科学会

▽春の断食研修会—4月27日から8日間。伊豆伊東で。八千円

▽青年土曜講座—「日本再発見」4月8日から5月27日まで毎土曜午後1時から4時まで。渋谷区東1の26の26富士ビル6階

※東京中央郵便局私書箱一六〇八号 電〇四八二—52—四九八六(神田)・二六二—〇〇二九(三都商事内—昼間)

■リベルテールの会

▽サロン・リベルテール—毎週火曜日午後六時半から、東京の中央線水道橋駅東南口の喫茶「終着駅」で。

■労働問題研究会

▽毎月第二第四土曜日午後六時から大阪の天満橋駅から徒歩5分の大阪府立労働会館にて。

※大阪市旭区高殿郵便局留 自連大阪気付 秋岡吟

■みみずの会

▽毎月第四土曜日の午後六時半から新宿区立赤城社会教育会館で。テーマは「労働と人間関係」

※電 東京二五五—六八七一東洋シユランク 北邦彦まで

■備北百人委員会

▽備北共同体建設のためにワークキャンプその他の活動中。

※大阪市東成区玉津二丁目 東成玉津郵便局留

■コミュニケーション好き者会

▽旧「月刊キブツ関西読者会」月一度の定例会を、通常、第四日曜日に大阪守口市の守口市民会館でおこなっている。

※尼崎市水堂榎木20 榎木荘内今井みさを方

■一燈園

▽智徳研修会—毎月七日・十日に実践研修により無所有奉仕の生き方を学ぶ。会費三千円。

※京都市東山区山科四の宮 光泉林 電五八—一三三三六

■山岸会

▽特別講習研鑽会—三重県の本部では毎月1日、15日、北海道の別海町では毎月21日から各一週間。費用は七千円。

※三重県阿山郡伊賀町川東 山岸会本部/東京都新宿区戸塚三一—一三 ヤマギシズム東京案内所 電三六八—四六五〇

■SCI

▽四月末から五月のはじめの一週間、山梨県金峰開拓にあるSCIハウスで「人種差別」をテーマにスタディ・キャンプをおこなう。

※東京都練馬区貫井3の35の11 電九〇—一九三三

■ワークキャンプを考える会

▽四月中旬に前項のSCIハウスで、ワークキャンプにかかわる種々な人が集まり考え合う。

※日本協同体協会 岸田哲

■名古屋読者会

▽毎月第三月曜日午後7時からF.I.W.C東海の新社務所で。

※名古屋市中区小幡太田88

小幡団地58—三〇一 梶原方 電七九三—七一一七

■府中読者会

▽第二第四土曜の夜 ※東京都府中市四谷3—55—20 ぐるうぶ・もぐら 電〇四二—一六四—一七二四

■仙台読者会

▽月一度、人民公社や共同体、キブツについて話し合う。

※仙台市三百人町一五七松泉堂アパートA 大原輝一郎気付

■広島読者会

▽第四土曜日五時から。 ※広島市青崎一—一十四池田敏雄気付 電82—七七五〇

■九州読者会

※福岡県三潁郡三潁町玉満二六三五の一 広松伸子気付 電〇九四二六—四二二二五

■日本協同体協会

▽第九回キブツ研修生出発 四月四日十二時五〇分、ソ連航空機で羽田から出発

※くわしくは事務局へ